

ある女のグリンプス

冥王まよひ子



冥王まよひ子

る女のグリンプス



河出書房新社

著者略歴

本名 柄谷真佐子 1939年、東京生れ
東大大学院英文科修士課程卒業、武蔵大
学講師
現住所 東京都世田谷区桜上水2, 22, 23

ある女のグリンプス

©1979 Masako Meio

1978年12月20日初版発行
1980年2月12日再版発行

著 者 冥王まさ子

装 画 白井昭子

装 丁 菊地信義

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2

電話 編集03-404-8611

営業03-404-1201

振替口座 (東京) 0-10802

印刷 亨有堂印刷

製本 小高製本

落丁・乱丁本はおとりかえします。

ある女のグリンプス

ニューヘイヴンは、四百年以上も前にイギリスからの移住者が開いた、ニューイングランドの由緒あるまちである。大西洋から奥深く入りこんでいるロング・アイランド海峡に面した、都市と呼ぶには小さすぎるこのまちは、初期には交易の中継地として、のちには漁港としてにぎわったが、今では名ばかりの繁華街を軸に、古い鉄道の駅と港を中心とする南部のさびれた工業地帯と、世界中から学者や学生が集まってくる名門大学の静かに若やいだ東の一角と、福祉のぬくもりと職とを求めて他の大都市から移ってくる黒人やプエルトリコ人が住む、北から西へかけての荒廃したアパート街とに三極分解し、それ以上の発展の見込みはまったくない。

まちの中心部は、古代ローマの築都法を模して格子形に区画され、その格子は北北西に傾いている。その傾きは、建設当時の知識で真北ではなく磁北に合わせて方角を

定めたためとも、ロング・アイランド海峡からの強風を避けるためともいわれている。また、北国の斜めの光線を最大限に採りいれるため、という説もある。

繁華街のすぐ東にグリーンと呼ばれる、濃淡の緑に彩られた広場があり、それがつてのこのまちの心臓である。グリーンは繁華街から大学街へとつづく道路によって北と南に分けられ、寺院通りと呼ばれるその道路に面して、宗派の異なる三つの教会が並んでいる。グリーンを四方から囲むようにして縦横に走る道路は、それぞれ礼拝堂通り、教会通り、櫛の木通り、大学通りと名づけられ、寺院通りと合わせてこのまちの由来をおごそかに物語っている。北国の心を圧しつぶしそうな斜めの光線を木の間から受けるこれらの通りを、かつて胸にあざやかに燃える緋色の文字を灰色のマントで覆い隠した女たちが、目くばせをかわしながら急ぎ足で通りぬけ、鬱蒼とした森の中に消えて行ったにちがいない、そう思わせるおし殺したなまめきを、このまちはかすかにとどめている。

ニューヘイヴンという名の起源には二つの説がある。新大陸に開いた港、とする説と、新しく見いだした天国、とする説である。どちらが正しいのかは今となっては知りようもないが、ピューリタンたちがこのまちを建設したのは遠い昔、近代綴字法が

成立し、発音が定まる以前だから、港^{（イヴン）}も天国^{（ヘヴン）}も区別していなかったと思われる。それよりも、当時の人々は意識して港という現実と天国という象徴とを重ねていたにちがいない。おなじ頃、べつのまちを築いた移民たちは、祖国でなじんでいた村の名をとって、ギルフォード、ミルフォード、ハムデンと名づけたり、新しいロンドン、新しいブリテン、新しいカナンと呼んで抱負を新天地に託したりした。細長い湾の奥で南面を海にむかつて開いたニューヘイヴンを三方からとり囲むフェア・ヘイヴン、ウエスト・ヘイヴン、ノース・ヘイヴン、イースト・ヘイヴンのまちの名が、開拓民の意識のありかを如実に語っている。特にノース・ヘイヴンは港をもたない内陸のまちである。

こんなふうに当時の人々は日々の単調な生活のむこう側に、もう一つの生を透かし見ていたにちがいない。それは過去であったり未来であったりした。この人々にとっては類比と暗喩があらゆる人間的な営みの根本にあった。それによって人々は未知の土地の未知の事物を親しいものに生れかわらせ、先の知れない断片の生活に形と意味を与え、自分たちの物語を生きていた。もし一つの比喩が効力を失えば、人々は惜しげもなくまちを捨て、土地を捨て、家を捨て、自己を捨てて、より新しい天国の比喩

をたぐりながら生れかわって行ったにちがいない。生き終え、あるいは途中で捨てられた自己は、化石となって家や土地にこびりつき、ニューヘイヴンはいつのまにかいくつもの過去が堆積するまちになっていた。

グリーンを囲んでひしめいている建物の群はグロテスクな光景を呈している。くろずんだ石造のゴシック建築、清楚な教会の白い尖塔、荘重なグレコ・ローマン式、モダンなガラス張りの高層ビル、典雅なヴィクトリアふうのホテル、殺風景な灰色のコンクリートの立方体、瀟洒な各王朝ふうやコロニアルふうの木造の家が雑然と建ち並び、それぞれ異なる過去に呪縛されて現実ばなれた空気を漂わせながら、楡や楓の濃い木立に半分埋もれている。建築の実験室として名高いこの小さな都市にどんな未来派的な建物が加えられても、まちの分裂病的な印象をさらに強めながら、いつのまにかちぐはぐな風景の一部となってよどんでしまっている。

このまちに長く住んでいると、人はそのちぐはぐな風景に同化して、まとまりの感覚を失ってしまい、自分が誰で、何をしたらよいのかわからなくなって、アクリイのように口と鼻を一つに長くのばし、自分の欲望をさぐりあてながら生きて行くよりほかはないような気持にさせられる。街にはあらゆる人種、あらゆる階層、あらゆる職

種の人々があふれているが、みな一樣に心の奥から遠くを眺めやるような表情で、ま
ちとおなじ現実ばなれした空気を漂わせながら、未来とはちがう方角へ歩いて行く。

生きる方向を失わせはするが、このまちの底にはどんな人間でも受けいれる投げや
りな寛大さがあって、自分に合った一角を嗅ぎあてて住みつく、その無名の居心地
よさから人は離れがたくなる。そこには何かしら人を過去へと沈ませてしまうものが
ある。それは、好むと好まざるとにかかわらず、個性の輪郭によってきっちり閉ざさ
れていた内部が方向を失って露わにされ、まちの統一を欠いた風景に溶けこんでしま
ったような感覚を味わわれるせいかもしれない。そのせいか、閉ざされた北国の陰
鬱さを嫌ってこのまちを去ったあとも、ニューヘイヴンという名のひびきに、人は特
別な感傷をそそられた。

それに、このまちは郷愁を抱くのちょうど適した大きさだった。

ニューヘイヴンでは毎年のようにおおくの出会いがある。毎年数千の人々がこのま
ちで出会い、そしてただ出会うだけである。毎日おなじ道路で出会い、おなじカフェ
テリアで出会い、図書館で出会い、グリーンで出会いながら、人々はめったに言葉を
かわさない。言葉をかわすようになって、めったに親しさは生れない。別れはあま

りにも自明だから、誰も出会いを喜ばず、誰も別れを惜しまない。去るときはひっそりと、無届けで一日欠席するようにまちから消え、その消息を気づかう者はほとんどいない。

だが、顕微鏡の下でせわしく動く菌類のように、おびたしい人々がすれちがうこのまちでは、ほんのときたま、遊星同士がぶつかり合うのとほぼおなじ確率で、不思議なめぐり合いが起ることがある。たとえば、見ず知らずの他人でありながら、自分が現在へと登りつめてくる途中で岐路や危機にぶつかるたびにふり捨て、生きそこねてきたもう一つの可能性を生き示しているような人物との出会いがそれである。そういう出会いを偶然と呼ぼうと、運命と呼ぼうと、人はとつぜん過去の貌かおをして現れた謎にとらえられ、わずかな偶然の符合や類似を手がかりに、広大な意味の世界にさまよいこんで行く。そのときニューヘイヴンはモザイクのように意味が空白を埋めつくす、奇蹟のまちに変貌する。ただそれは、人は二つまたは三つの生が重なり合い、まざり合うあの暗喩の領域で意味と意味の間を縫いながら生きているのだ、と知っている者だけが見いだす奇蹟である。それは悔恨かも知れず、ただの驚きにすぎないかもしれない。だが、人は、もしもあのとき、という過去の可能性を想像しながら、生き

そびれたもう一つの生、もう一つの自己を現在の限られた生の埋め草のようにつなぎ合わせ、けっして見ることでできない生の全体像を垣間見たような錯覚を起す。あるいはそれはわたしたちが達しうる最大の幸福なのかもしれない。ある年、このまちでそういうめぐり会いがあった。

1

由岐子がニューヘイヴンを二年ぶりで訪れたのは、十月ははじめのある晴れた日だった。ニューヨークから一人でレンタ・カーを運転して、ボストンへ向かう途中だった。ニューイングランドの十月は森という森が緋色に燃える季節だったが、日本まで伝えられていたように今年は夏の暑気がいつまでもつづいたせい、ニューヘイヴンを包む森はところどころ色紙を貼ったように赤くなっているほかは暗緑色に沈んでいた。由岐子はくろぐろとした森に動物じみた恐怖心を抱いていた。森に迷いこんだ人間はけっして奥へ奥へと歩かず、縁の近くをぐるぐると円を描いて歩きつづける、どこかで読んだが、森には方向感覚を失わせてしまう魔力があるのだ、と由岐子は思っ

いた。二年前までニューヘイヴンにいたとき、夜の森の道を一人で車を走らせている途中、ふいに恐怖に襲われたことがあった。暗い夜の森はシェーベルトの魔王の棲むところだった。由岐子をおそろしい力で闇の奥に引きずりこもうとする魔王がすぐ肩のところまで迫っていた。それを必死で逃れながら、果てしない森をどう走りぬけたのか、由岐子には思い出せない。いい年をして、と自分に呆れながら、森は昼間でもこわかった。

だが、絢爛とした秋の森はべつだった。おなじ森で色が変わればどうしてこうもちがうのか、奥に踏みいるほどに火祭りに似たあかあかと燃える光景が開け、地面に厚くもった落葉の上にあおむけに寝ると、黄やだいだいの炎の間からあたたかくのぞき出せる青空は、それが存在の果てなのだという充足感を由岐子に味わわせてくれる。

北に進むうちにどこかで南下してくる緋色の隊列と出会うだろう、ボストンの周辺はもう紅葉たけなわかもしれない、と由岐子は思った。想像の中で燃えさかるニューヘイヴンの森と、二十年前にボストンの近郊で見た炎を噴き上げる森とが重なって、はなやかさを増した。それは由岐子にとってもう二度と味わえない類いの幸福の象徴だった。もう二度と、と自分にいい聞かせながら、その幸福の感触をなぞるために、

由岐子はニューヨークまで疾駆して来たのだった。

ニューヨークランドは由岐子のもう一つのふるさとだった。二十年前、由岐子はボストンに近いノアウッドのまちの高校にかよう交換留学生だった。そして、想像の中にしかないと思っていたものが現実にもありうることを知ってとまどっている、十八歳の少女だった。

夏のはじめにその高校から、卒業二十年を記念する同窓会の通知が由岐子の実家に舞いこんだ。遠い日本からの出席をあてにはしていない、儀礼的な案内状だったが、由岐子は自分の中で何かが息を吹き返すのを感じて、貯金を全部おろし、龍夫の母に関西から上京してもらって一人と二人の世話を頼み、旅行バッグに卒業アルバムをしのばせて、あたふたとアメリカに飛んで来たのだった。行儀のよいアメリカの古典時代から、新しい自己のありかたを模索して、バニー・ホップでとび出したあのティーンエージャーの熱狂はどこへ行ってしまっただろうか。たるんだ頬や、突き出た腹や、禿げ上がった頭の中で眠りこけているにちがいない。一通の案内状がそれを揺り起したかもしれない。もう誰もが過去を懐しむ年齢になっていた。

ニューヘイヴンはニューヨークとボストンのほぼ中間にあった。それは由岐子にとって過去への中継地だった。二年前にニューヘイヴンで、由岐子は自分の中のアメリカを、ティーンエージャーを喚びさまされていた。ある出会いがそのきっかけだった。それを通して、由岐子は、人は現在と過去とを同時に生きていることを知ったのだった。外国文学者としての行き詰まりと、あとは老いるだけ、という中年にさしかかった女の惑いをようやく突破して、後半生という、由岐子の人生のまったく新しい局面をきり拓く端緒となったその出会いを、「ニューヘイヴン物語」という題で小説に書くつもりだった。日本に帰ってからの二年間、構想を練りつづけ、ノートが分厚くたまっていたが、いつ、どうやって書きはじめられるかは見当もつかなかった。今度のニューイングランド旅行は、ひょっとしたら、書くきっかけをつかむための天与のチャンスかもしれない。なかった。

ニューヘイヴンははじめ、由岐子がたまたま行き合わせた一つの未知の場所にすぎなかった。由岐子は控え目な異邦人として、ニューヘイヴンをよそ目で眺めるだけのつもりでいた。だが、このまちの醸し出す異様な雰囲気のせい、または見るもの聞くものを最初の体験と結びつけずにはいられない、二度目の体験につきもののあの奇

妙な二重の知覚のせいか、運命としか呼びようのないいくつかのできごとのせいか、由岐子はしだいにニューヘイヴンにさまざまな意味を読みこみはじめ、ニューヘイヴンの風景はいつのまにか由岐子にさえも部分的にしか解読できない絵文字になってしまった。意味が幾重にもかさなり合い、像と像が溶け合って、由岐子自身まだ踏みこんだことのない奥行きを、ニューヘイヴンは示しはじめた。どんな事物も風景も二つの眼には暗喩として現前することをまぬかれないとしても、過剰な意味に埋もれたニューヘイヴンに由岐子は吐き気を感じるようになっていた。人は意味をつなぎ合わせた物語に固執せずにはいられないが、それは自己への惑溺だ、と由岐子は思っている。だが、惑溺なしに健全な物語を織りつむぐことは容易なわざではなかった。素顔のニューヘイヴンなどあるはずはなく、また自分とは無関係のまちに客観的な意味がもてるはずもないが、由岐子はすくなくとも二年の間にニューヘイヴンに つもった意味を剥ぎとるために、そして由岐子をあの現実ばなれした感覚に誘いこんだまちが実在することをつしかめるために、犯人が犯行現場に立ち戻るように、歩きなれた道をもう一度たどってみたいと思っていた。同窓会の帰りにニューヘイヴンに寄り、ついでに「物語」に必要なメモをとろうと、二年間に書きためたノートを卒業アルバムと一緒に

に由岐子は大事にかかえて来た。

お前の懐古趣味につき合ってやるよ。そう恩に着せながら、龍夫もニューヨークまでやって来た。アメリカで本を出版するために近くニューヘイヴン時代の知人に会いに来ることになっていた龍夫は、ホテルや航空券の予約はおろか、着替えをスーツケースに詰めることも億劫がるたちなので、自分の予定を早めて由岐子のとつぜんの旅行に喜んで便乗した。由岐子もいつのまにか身についた習性で、龍夫のつきそいという大義名分ができたことを喜んだ。龍夫にしろ、由岐子にしろ、理由はそれぞれ異なるが、自分のことにふけるにはいつもたくさんの動機づけが要った。

ボストンまで二百余マイルの道のりを交代で車を運転しながら、二人で騒々しい旅をするはずだったが、ニューヨークに着いてすぐ、フランスの著名な哲学者がコロンビア大学に講演に来ている、と友人から聞き、龍夫はせっかくの機会だから会っておく、といい出した。もめた末、三日後の月曜日に最終の目的地ニューヘイヴンで落ち合うことに決めて、由岐子は一人でニューイングランドに行くことになった。いつもあなたは土壇場であたしを放り出すんだから、とうらんでみせて、由岐子は内心喜ん